

●テーマ 座談会 **「東日本大震災とクラブ、復興に向けてクラブが果たす役割」**

●参加者

<コーディネーター>

黒須 充 さん（福島大学教授、地域スポーツクラブ育成専門委員会副委員長）

<総合型地域スポーツクラブ>

西館 敦さん（いちのへサンビレッジクラブ クラブマネジャー／岩手県一戸町）

伊藤 弘江さん（NPO 法人アクアゆめクラブ クラブマネジャー／宮城県七ヶ浜町）

林 千登美さん（NPO 法人さくらスポーツクラブ 事務局長／福島県富岡町）

<クラブ育成アドバイザー>

伊藤 啓太さん（岩手県）

相田 恵美さん（宮城県）

海老根 慧さん（福島県）

●実施日：平成23年11月21日（月）／会 場：宮城県体育協会 会議室

●内容

第1部 震災直後・・・・・・・・・・2ページ

3月11日、震災直後やその日の様子は・・・／震災後、クラブとしてどう動いたか／各県の地域・クラブの被災状況

第2部 ターニングポイント・・・・・・・・5ページ

元気な人が元気を出す／夏過ぎてからスポーツへの参加が増える／5,000人も集まった10月「スポーツ復興まつり」／再会の機会をつくったスポーツイベント／福島県の子どもは少なかった／震災後まもなく、県外クラブからの各種支援／県外からの依頼や、県内のクラブ同士の助け合い

第3部 復興へ向けて・・・・・・・・・・9ページ

長期的に関われる仕組みづくりが必要／日常生活での「つながりの仕組み」の核として／クラブ自身が一歩前に踏み出す／地区を超えたコミュニティをつくる役割／クラブの自立に向けて必要なこと



座談会の当日の様子

第1部 震災直後

3月11日、震災直後やその日の様子は・・・

【黒須】いまだに震災の爪痕を目にしますし、被災者にとって通常の生活に戻るには、まだまだ時間がかかります。まず、震災直後についておうかがいします。どのような様子でしたか。

【伊藤(弘)】セヶ浜町は七つの浜からなっていて、三方海に囲まれているため津波の被害にあいました。幸い、クラブは高台にある役場の近くにあるので津波の被害は少なかったです。3月11日は、午後3時半から子ども向けのスクールがあり、ワゴン車の送迎が2時45分に出ようとしていました。ちょうどその時に地震が起こり、送迎をストップしました。指定管理者として管理している町民プールに走って行き、利用者にすぐに帰っていただくようにしました。スタッフをクラブハウスに全員集めて、役場の指示待ちになりました。

役場には町民が集まり、ごった返していました。管理している体育施設は確実に避難所になると思い、あるだけのバスタオルと毛布、キャンプで使ったランタンやロウソクを用意しました。理事長や理事に連絡がとれなくて、自分がしっかりして何とかしなければ、という状況でした。スタッフは全員帰らず、クラブに居ることになりました。

メールがやっとつながるようになり、夜には理事全員無事であることがわかりました。理事は、普段は車で30分しかかからない所を5、6時間かけてクラブに駆けつけてくれました。夜中の3時に到着した理事もいて、クラブの会議室に寝袋を用意して泊まりました。



伊藤弘江さん

私の自宅は海から5軒目位にあり、形は残っているものの、並びにある海沿いの1、2軒分の瓦礫や屋根が押し寄せてきて、玄関から入れない状態でした。

両親に連絡がとれず、近くの避難所の小学校に行ったら母は無事にそこにいました。一緒になかった父からは、夜中にメールが来て無事が確認できました。

【林】震災発生時には、さくらスポーツクラブの職員3名のうち2名が事務所におり、他に、同じ場所に事務所がある町体協の職員もいました。揺れが収まると同時に、津波から逃れてきた人たちが隣接する町営体育館に集まってきたので、役場職員、町体協職員と一緒に「避難所」として運営することになりました。

地震直後は強風と雹(ひょう)で非常に寒かったのですが、避難してきた方たちは着の身着のままなので、寒さ対策をしたり、ひとりで来た子どもの保護者に連絡をとったりと、てんやわんやでした。

夕方になるにつれ、体育館では大型ヒーターを焚いても寒さ対策が追いつかないので、もう少し条件が良い小中学校の体育館に町のマイクロバスで移動してもらいました。夜になりやっと自宅に帰りましたが、水道・電気は止まっていた。

翌12日朝7時30分、防災無線の一斉放送で「福島第一原発の状況が心配なので、念のため隣の川内村に避難するように」との指示がありました。ほとんどの町民は半日位で帰れると思いき、大した荷物も持たずに避難バスの出発地点に向かいました。確保できたバスの台数には限りがあり、全員は乗れないため、運転可能な人は個人車で移動してくれ、との依頼がありました。

個人的には、朝7時半に自家用車で出発し、あちこちの交差点に立っている警察、消防関係者の指示を仰ぎながら進みましたが、川内村の避難所が満杯のため別の避難所に行くように指示されました。その後も「満員です」が続き、6カ所目位の本宮市の避難所(本宮高校)に、夜8時半に入ることができました。避難所には同じ富岡町の町民が200名位避難していましたが、本宮高校の先生のお世話で夜9時頃、おにぎりとお水を届けていただきました。

富岡町役場と連絡がつかない中、「とにかく避難所で、できることをしよう」と、富岡町からの避難者をまとめる形で、連絡係のようなことに約1週間従事しました。

川内村には、役場機能とともに富岡町民約6,000人が避難していましたが、福島第一原発の状況が悪化したため、3月17日、郡山の「ビッグパレットふくしま」へ避難しました。そこまでが約1週間位の出来事です。

震災後、クラブとしてどう動いたか

【伊藤(弘)】アクアゆめクラブが指定管理しているスタジアムと武道館を避難所にする指示が町からでて、スタッフをはりつけました。しかし、中央公民館と役場、学校施設には発電機があり電気がつくので移動の指示があり、その避難所は閉鎖し、5つの学校、中央公民館、国際村、役場、高台にある文化施設の10カ所が避難所になりました。

クラブの活動は全くできませんでしたが、家も津波にやられたのでクラブに寝泊まりしました。専務理事から「施設を預かる者として、いつ町から指示がでるかかわからないので職員は全員出勤しよう」といわれ、そうになりました。避難所が解散するまでの1ヶ月半位は、クラブに寝泊まりしました。

町での給水は、狭い場所だったので町民が2~3kmも並んでしまい、町から13日、クラブに給水の仕事をしてほしいとの依頼がありました。クラブハウスの周辺は、スポーツ施設に囲まれ大きな駐車場もあり、大勢の町民が来ても余裕があります。給水の仕事をクラブはボランティアとして精力的にお手伝いしました。それが認められて、今は仮設住宅の管理業務を町から受託しています。

【林】急な避難だったのでクラブの金庫にお金や通帳を保管したままでした。3月1日から新年度会員更新の受付をしていたので、通常よりも多額の現金を保管してありました。最初の1週間は、クラブの電話等の停止や口座の凍結の事務処理にも追われていました。

震災1週間後には、私もクラブマネジャーも東京に再避難しましたが、クラブに残してきた通帳・公印・現金が気になり、3月末に富岡町災害対策本部があり避難所にもなっている郡山市の「ビッグパレットふくしま」に行きました。オフサイトセンターの許可を得て、テレビで見るとような防護マスクと防護服を装着して警戒地域に入り、町体協の事務局長とともにクラブの事務所から通帳・公印・現金等を持ち出すことが出来ました。

当初は、理事会を開催しようにも集まれるのは理事長だけで、連絡がとれない理事も多く、理事会は全く開けませんでした。状況によっては解散もありえるので、先の見通しがつくまでクラブの活動を休むことになりました。しかし実際は、福島県に提出する報告書の作成や後始末の事務がありました。

また、震災前に新年度の会員更新していた会員が約200世帯おり、徴収済みの会費が180万円位あり

ました。会員の居所がわからない中で返金するのは容易ではありませんでしたが、連絡先を登録している人から携帯電話で連絡をとり、あとは「お友達つながり」で連絡先を教えてもらい、全部の返金が終わったのが9月頃でした。

クラブはNPO法人なので存続のためには10人以上の正会員がいなければなりません。3か月が経過して少し落ち着いた頃に総会を開催して、正会員の会費5,000円を2,000円に改定して正会員を募ったところ、約30人が正会員になってくださり、存続が決まりました。総会には町長も出席され、「このような時だからこそ、スポーツが大事。人との絆づくり、生きがいづくりを無くしてはいけない。徐々に復興に向けてスポーツが必要になるので、さくらスポーツクラブの役割は大きい」とあいさつしてくださいました。同じ頃、福島県のスポーツ振興基金の助成金に決定したとの連絡がありました。



林千登美さん

【西館】いちのへサンビレッジクラブは、岩手県一戸町という内陸北部に位置しているので、我々の地域やクラブは、停電が1日半から2日間、断水も同じ位で被害は軽かったです。震災後は、車で動ける範囲で安否確認をしました。1週間程度は活動を自粛しつつ、でも活動を止めないように1週間に1回程度、電気を使わない昼間に活動を行っていました。同時に、今後どうしていこうかというミーティングを開催していました。

一戸町でもガソリン不足が深刻でした。車がないと何もできない地域なので、半数以上の職場は1週間から10日間、休みの状態でした。連絡網が滞っていたので、クラブの活動がある日にはスタッフが現場に行って「今日はできません」と会員に伝えるようにしていました。活動が実施可能な時は、1人でも来てくれたら行う方針にしていました。

各県の地域・クラブの被災状況

【黒須】被災された中で、被災者の支援をされていたことがよくわかります。アドバイザーからは県全体の状況など教えていただけますか。

【伊藤(啓)】岩手県は地震より津波の影響が大きく、内陸と沿岸で被害の状況が違います。内陸は停電 1 日から 1 週間程度で、沿岸部では津波で町が壊滅した地域もあります。岩手県では沿岸部にクラブが 5, 6 か所ありますが、沿岸部でも県北部では被害はなく、活動は一時停止しましたが今は再開しています。

被害が大きかったのは、大槌町の「吉里吉里スポーツクラブ」で、現在も活動休止中です。指導者や会員の多くが地域を離れており、地域の中に集まれる場所がない状況です。宮古市にある「シーアリーナススポーツクラブ」は宮古市体協が運営しているクラブで、指定管理している体育館の建物自体は残ったものの、自衛隊・警察の基地になりました。1 か月位後には避難所となり、8 月末まで活動休止状態でした。10 月より活動を再開しています。釜石市には、2 つクラブがあります。「唐丹(とうに)すぽこんクラブ」では、地域の 3 割の家が津波でなくなり、避難所での運動指導など、できることから行っています。

「釜石シーウェイブス」は、テレビでも取り上げてもらいました。地域に根差したラグビーチームとして、4, 5 月はボランティアで物資を運んだり、瓦礫処理のお手伝いをしたりして、5 月から活動再開しました。地域に根差したクラブを標榜しているので、釜石市のためになることは何かと考えながら活動しています。被害が大きかったのはこの 4 つのクラブでした。



伊藤啓太さん

【相田】宮城県内の 32 クラブの中には、気仙沼市、女川町、石巻市、七ヶ浜町など沿岸部を本拠地としているクラブがあります。地震と津波による被害は

甚大で特に沿岸部は想像を絶するものがありました。内陸部も地震の影響から使用出来なかったり、使用可能な施設も避難所や物資倉庫の役割担っていたことから、震災直後は県内ほぼ全てのクラブが活動休止状態でした。

県内の中で石巻市は人的被害が一番大きかった地域です。石巻市内に「NPO 法人石巻スポーツ振興サポートセンター」「いしのまき総合型スポーツクラブ」の 2 つの総合型地域スポーツクラブが活動しています。

「NPO 法人石巻スポーツ振興サポートセンター」理事長の店舗兼クラブハウスは建物の 1 階天井まで津波が押し寄せパソコンやスポーツ用品が流出し、ご自宅は全壊しました。震災直後から避難所生活を送っていましたが、自治体が避難所対応まで手が回らない様子を見て、避難所のリーダーをつとめながら様々な役割を果たしてきました。理事長は、現在、仮設住宅にいますが、ご自身が最も困難な状況の中でも困っている地域の人達をまず助けていました。

また、理事長はインターネットで全国へ発信し義援金を募り、津波でスポーツ用具等を失くした子どもたちへスポーツ用具を支援する「わんぱく復興プロジェクト」を立ち上げ学校を通して用具を配布したり、空きスペースを利用したボール遊びを実施したり、7 月頃からは「石巻復興ウォーキング」を開催しました。

「そんなことやっている場合ではない」「震災のひどい状況を人に見せてどうするのだ」など、様々な意見がある中で、“まず現状を知ってもらうことが重要”と考え多くの方の協力を得るために全国へ情報を発信しました。ウォーキング開催当日は、東京や遠くは鳥取からの参加者もありました。参加費の一部は義援金として市へ渡しています。

【海老根】福島県では、地震、津波に加えて原子力発電所の事故がありました。福島県は、浜通り、中通り、会津地区の 3 地区に分かれています。会津地区はほぼ問題なく、中通り地区は、避難者の受け入れで体育施設が使われていました。

沿岸部の浜通り地区は、距離によって警戒区域に定められています。浜通り地区はさらに、相馬地区、双葉地区、いわき地区の 3 つに分かれており、相馬地区の一部と双葉地区は避難を余儀なくさせられた地区です。震災後の避難は、個人の判断に委ねられたことも多かったので、住民は全国バラバラに住んでいる状態になっています。いわき地区と相馬地区

の一部は、警戒地区に入っていなかったのですが、かえって判断が複雑な状況でした。

県内83のクラブの半数以上が、震災直後は活動できない状況が続いていました。福島県では現在も、放射能の影響があります。子どものいる保護者は、学校の判断を支持するようで、「学校でやっていないのに、なぜクラブでやるのか」、反対に「何でやってくれないのか」という意見もあります。クラブは「絶対大丈夫」と言い切れず、判断が難しい状況にある中、できる限りリスクマネジメントしながら、徐々に活動を再開しつつあります。

震災に加えて南会津町では7月に発生した豪雨の被害がかなり大きく、いくつかの橋が寸断されました。9月に会津の方と会議で会った際も、「午前中、泥かきしてきたよ」と言っていました。

第2部 ターニングポイント

元気な人が元気を出す

【黒須】震災直後は命をつなぐことで精一杯でしたが、徐々に体を動かすことやスポーツへの欲求がでてきます。クラブが主催したイベント等でターニングポイントになった事例はありませんか。クラブが行ったことで、スポーツに対して地域の人たちが少し前向きになっていったような……。

【西館】そのような「きっかけづくり」のためのイベントとして、4月24日から「チャリティー・スポーツイベント」を行いました。最初は単発でしたが継続することが大事なので「第一弾」とつけました。「元気な人が元気を出す」という主旨で4種目のスポーツを実施、人間が行うバッティングセンターのようなものやウォーキングなどで、参加料全額を日本赤十字へ寄付しました。

被災地への支援は、どのように手をつけていいかわからなかったのですが、やれるところでやれる人から始めようとクラブ内で話合いました。「岩手でも元気な活動をしている」「他でも真似してできればいい」という情報発信ができればと考えています。

クラブでは5月から通常の活動ができるようになりました。やればやったで「今こんな時に」と言われますが、「やった方がいい」という意見の人が多か

ったです。なるべく外部の先生は呼ばず、車で行ける範囲の地元で開催しました。被災後、活動を休止しても会員数が減ることはありませんでした。

活動は少し続けていたし、「今やるべきことは何か」という手紙を会員に送って、つながりを持てるようにと、何かあったらFAXや郵送で返信してもらうようにしました。我々のクラブの会員は、入った時点から1年間が有効です。3月が全て年度末というわけではなかったのですが、3月という時期が特に問題になることはありませんでした。



西館 敦さん

【黒須】アクアゆめクラブで、クラブを再開するきっかけになったのは？

【伊藤(弘)】七ヶ浜はだいぶ施設がやられてしまい、町民体育館を壊すことになってしまいました。震災直後使える状態だったのは、第一スポーツ広場と野球場と町民プールだけでした。テニスコートは地割れで波打ってしまって使えませんでした。第一スポーツ広場には仮設住宅が建つことになり、野球場まで仮設が建つ予定でしたが、町長は野球場を残そうとしました。

クラブは3月が年度末で更新の時期で2月に更新手続きの案内を会員に郵送していたので、3月11日までに更新していた人も多くいました。震災の2週間後「ごめんなさい、更新していなかったの。いくら払えばいいの」という保護者の方がやって来たのです。復旧の目途がたっておらずクラブの活動ができる状態ではなかったのですが、保護者の方は「子どもが早くプールで泳ぎを習いたい、と。『お母さん、手続きに行っていないでしょう』と言われたので慌ててきた」という話でした。住民は「意外とスポーツしたいのかも」と思いました。

その後も「(クラブの活動を)いつからやりますか」との問い合わせがポツポツあったので、「できるとこ

ろからしたい」と提案し、まずは教育長、町長に話をしました。教育長も「どんどんやれ」、町長も「元気なところから、がんばろうよ」と。「おまえたちの体力のあるところで、無理をしないでやりなさい。野球場とプールだけでもいい。伊藤さんの家も大変なんだから」と言ってもらいました。そこで、5月の連休明けから、野球場とプールからクラブの活動を再開しました。

夏過ぎてからスポーツへの参加が増える

【伊藤(弘)】5月連休明けから活動を再開した当初、会員更新にはあまり来てくれませんでした。平成21年度の終わりに会員数は600名を超えていました(目標数は1,200名)。指導者と連絡を取り、会員の様子をみながらやっていくことにしました。水泳は250人以上の子ども達が参加していましたが5月の再開当初は20名位しか集まりませんでした。例年、夏をピークに秋以降入会がなくなりますが、今年は夏以降も伸びていて平成23年11月現在で580名の会員になり、例年に比べて秋口にも会員が入っています。

クラブでは「スポーツバイキング」というスポーツをしない子ども向けのきっかけづくりのプログラムを行っていますが、外でやっているサッカー、太極拳やヨガをはじめ、ドッジボール、エンジョイ野球、バドミントンは、ほとんどできていませんでした。しかし夏過ぎてから、それらのスポーツのニーズは増え、参加者は倍になっています。例えば、サッカーは以前10人位であったのが、今は30人を超えています。

10月の三連休に、町では「スポーツフェスタ」というスポーツのフェスティバルをやっています。1日目は、クラブでのスポーツ大会、2日目は地区ごと対抗の町民運動会、3日目は体協主催のスポーツ大会・教室です。

本年度初めの5、6月、「スポーツ行事はなし」と決まりましたが、これだけニーズがあるので「やりたい」と町長に話に行ったら、「どんどんやれ」と。次に教育長に話に行き「スポーツフェスタはできないが、スポーツで復興祭りをしたい」と話をしました。その時、サッカースタジアムは、遺失物の保管室になっていましたが移動させて、「スポーツ復興まつり」(10月10日)で使うために芝生を養生させました。

5,000人も集まった10月「スポーツ復興まつり」

【伊藤(弘)】イベント当日、「ガラガラだったらどうしよう」と心配しましたが、5,000人も来て大盛況でした。幼児・保育園にはいつもの通り、お遊戯の声をかけ、ストライクアウトなどのニュースポーツやゲームを20種類位用意もしました。

仮設住宅などにいつも来ている炊き出しボランティアにも「駐車場を開放するので、そこで炊き出しをやってくれないか」と声をかけたら、6団体が来てくれました。

炊き出しだけでなく、スポーツのフィールドにも人がたくさん並びました。その時、全てのスポーツ参加用のカードを配り、1円でもOKということで義援金と交換に配布したら、約30万円近く集まりました。

我々のクラブは無料にはせず、受益者負担でやってきました。仮設の人は何でも与えられており、お金の使い方を忘れていたのではないかと思うほどです。自分で復興していく気持で前向きになってもらいたいと思って企画した「スポーツ復興まつり」。これを皮切りに、我々も少しずつイベントなどを始めています。

【黒須】スポーツは体を動かすだけでなく、人と会えたりします。無限の力があると感じます。



黒須 充さん

【伊藤(弘)】仮設住宅の管理もしているので様々な住民の声が入ります。「よかった、あの時のスポーツ」。「会えなかった近所の人と6ヶ月ぶりに会えた」「楽しかった」など意見・感想をたくさん聞くことができました。スポーツは本当にいいものだな、私たちももっとがんばらなければいけないと感じました。

再会の機会をつくったスポーツイベント

【黒須】10月にあった福島県での「さくらスポーツフェスタ」について、実施の経緯も含めて話してください。

【林】「さくらスポーツフェスタ」は、実際に開催できるかどうか、わかりませんでした。今まで何百人もいた活動会員が全国各地に避難している状態で、準備や運営がどうなるのか、想像できない状態でした。会長からは「決心しないと始まらないから、できることからやりましょう」と前向きな指示があり、「うつくしまスポーツ振興基金」の助成もあって、開催を決めました。

富岡町のクラブの周りには野球場やふれあいドーム（屋内競技場）、体育館も合宿センターも全てのスポーツ施設がありましたが、今回はこれらの施設が使えないため、会場探しから始めました。その結果、仮設住宅があり多くの富岡町民が避難する大玉村の農村環境改善センターを借りることとしました。大玉村教育委員会や大玉村スポーツクラブの全面的な協力のもと、10月22日に開催することができました。参加者を集めるために、町の協力で周辺の仮設住宅をバスで巡回してもらい、大玉村までの足を確保いたしました。

「スタッフが足りなくてすごく困っている」というつくしま広域スポーツセンターに相談したところ、福島大学の学生や、うつくしまスポーツクラブユニオン（クラブの連合団体）に声を掛けてくれました。当日は、初めてお会いするクラブの方を含め、約100人の方が手伝いに来てくれて、なんとか開催できました。

あいにくの雨になってしまい、グラウンドゴルフ大会は開催できませんでしたが、ノルディックウォーキング体験や屋内での各種体験・運動教室、ゲームなど楽しく過ごすことが出来ました。「会えてよかった」「久々に再会できた」という会話があちこちで聞こえて、苦しい中やってよかったと思いました。一番うれしかったのが「こういう機会がないと、なかなか会えない」と言ってもらえたことです。

福島県の子どもは少なかった

【林】ただ、子どもたちについては県外に避難している例が多く、あまり集まりませんでした。子どもたちが楽しめる木工体験なども用意して、全町民に向けて広報紙も送りましたが、富岡町で開催した時

のようには集まりませんでした。

「子どもがいないとさみしいだろう」と埼玉県「NPO 法人浦和スポーツクラブ」から事前に連絡があり、子どもたちを連れてきてくれました。浦和に住む子どもたちがほとんどでしたが、放射能が心配で土遊びはできず、レクリエーションや屋内の体操教室（ボクササイズ、健康体操など）に参加してもらいました。

12月から高齢者向けの体操をする予定です。これまでクラブでは、乳幼児から高齢者までというスタンスでやってきましたが、現状では、子ども対象は難しいようです。三春町には、富岡町の小中学生が約90人いますが、それ以外は、それぞれの避難先の学校に通学しています。

以前のように色々な事業を復活したい気持ちはありますが、定期的な活動を開催する場所の確保も難しく、困難な状況です。

震災後まもなく、県外クラブからの各種支援

【黒須】次に、県内・県外のクラブのつながり、人とのつながりについて話を聞きます。県外の人から励ましてもらうなど、「クラブがあってよかった」「クラブのつながりが大きな支えになった」というようなことはなかったですか。

【伊藤（弘）】七ヶ浜では電話の基地が全て流されて、電話もインターネットも回線がつながりませんでした。「全く連絡がとれないから直接来た」というのが、山形県の総合型地域スポーツクラブで、以前立ち上げのときに視察に来たことがある「おぐにスポーツクラブ Yui（結）」でした。突然来て、「何かできないかと思って」と、20リットルのガソリンを持ってきてくれました。使い捨ての歯ブラシやポケットティッシュなど、いろいろとたくさん持ってきてくれたのが、初めての県外からの支援でした。

町では3日間位、県庁に被害届を出せず、3日目の夜に初めて支援物資が来た状態でした。それまで小さなおにぎり1日1個という日々が続いていました。おぐにスポーツクラブは、震災5、6日目にきてくれて印象深かったです。

その後、宮崎県の「半九レインボースポーツクラブ」が10トントラックで来てくれました。大量の物資だったので町の備蓄にまわしてもらいました。「これはクラブだけ。ぜひ伊藤さんに食べてもらいたい」という果物もどさっと置いて、スタッフ皆で「今日

はご飯が果物」と喜んで食べました。とても印象に残っています。

広島県の「どんぐりクラブ屋台村」は、指定管理をとった時に視察に来たクラブでした。「全然連絡とれないので落ち着いた頃に連絡くれ。必ず何か支援するから」と手紙をもらいました。回線がつながった時にすぐに「ありがとうございます。大丈夫です」と連絡をしたら、チャレンジデーで使ったウェアを大量に送ってきてくれました。それはクラブのためでなくて、被災している町の皆さんに差し上げました。「NPO 法人クラブネット」からは「子ども達のために使ってください」と支援金をもらいました。

どんぐりクラブや屋台村では、アクアゆめクラブとのタイアップのイベントで、アクアゆめクラブで作成している町の復興 T シャツ (1,500~1,600 円) を 30 枚買ってくれたり、宮城のサンマを買って焼いて販売して義援金という形でいただいたりしました。阪神淡路大震災や新潟県中越地震の時にはこちらで何も支援していませんが、今回、全国から支援したいという声が多くて感謝の気持ちでいっぱいです。仮設住宅をあずかっており、物資は 421 世帯、1,700 人分行き渡る物資でないと受け入れないようにしていますが、全部に行き渡る支援がたくさんあり頭が下がる思いです。

県外からの依頼や、県内のクラブ同士の助け合い

【海老根】 震災以降 3 日間は実家のいわき市に戻っていました。その後、うつくしま広域スポーツセンターの方々は県の原子力対策本部の仕事にあたったので、クラブ対応は自分がやっていました。県外から「立ち上げの時、お世話になった」とたくさんの励ましや安否確認の連絡をもらいました。福島クラブをなくしてはいけなく強い気持ちになりました。



海老根 慧さん

先程の半九レインボースポーツクラブからは、口蹄疫で罹災しているので「大変さがわかるから、動かすにはいられなかった」と言う言葉をいただき、自分達が文句ばかり言っていたことが恥ずかしくなり、「やれることをやらないといけない」という気持ちになりました。

そのほか、福岡県の方からアドバイザーのつながりで、福岡に来て震災のことを話してくれと依頼があり、4 月に福岡に行ってきました。そこに福岡出身で福島の警戒地域から来ているクラブ関係者がいました。こちらでクラブに関わりたいとの相談を受けたので、ちょうど福岡県の連絡協議会に行く際に来ていただきクラブや関係者の紹介をしました。

「いつか地元に戻ってやれるときまで、自分を高めておきます」というモチベーションの高い方でした。

福島県には「こちらで子ども達を受け入れたい」という支援を多数いただき、できる範囲で対応しています。ドイツから福島の子も達が招待されましたが、そこに参加した子ども達は日本に戻ってきて子ども達同士で集まろうという話にもなっています。絆が絆を生み出すことも震災後増えていると思います。我々の役割はつなぎ役。全国的なつながりは総合型クラブならではのものなので、今後も強めていければと思っています。

県内同士でも、震災直後に会津地区のクラブが南相馬へ瓦礫撤去の手伝いに行ったり処理をしたり、会津が大変な時に別の市町村のクラブが助けに行ったりしました。これまで(クラブを)全市町村(合併前の旧 90 市町村)に作ることを目標にやってきましたが、いろいろな地区にクラブがあつてよかったと改めて実感し、今後はさらに充実させていきたいと思いました。



第3部 復興に向けて

長期的に関わる仕組みづくりが必要

【黒須】岩手県の場合は、比較的被害の少なかった内陸側のクラブが沿岸部を支援しています。スポーツの復旧復興をしていく時に、内陸部の果たす役割は大きいと思われます。

【伊藤(啓)】内陸部にある「NPO 法人フォルダ」は、指定管理している施設の事務所の中にボランティア団体を立ち上げ、全国のクラブに支援を呼び掛けて物資を集め、数か月間、沿岸部に通っていました。沿岸部にはスポーツをする場所がないので、内陸側に招待してスポーツをしてリフレッシュして帰ってもらうイベントや事業は多くのクラブでやっています。内陸のクラブで仮設住宅・集会場でできる運動や、今のところ個々のクラブや団体同士のつながりで活動しています。

みんなでまとまってスポーツ界として活動しているという感じではないし、連絡協議会の役員会の中でも方向性はでていません。これからは、組織として継続してできることを検討してやっていく時期に来ています。短期的でなく、長期的に関わる仕組みづくりを今から作っておく必要があると思っています。

私は、岩手発で情報収集・発信していますが、今後も続けていきたいです。元気で活動している人も多いので、その面で発信していきたい。今年度中に沿岸部で新しく立ち上がるクラブもあります。他県とクラブとのつながりをつくり、何か新たなことができればいいと考えています。いろいろなつながりが持てる仕組みを作りたいです。

日常生活での「つながりの仕組み」の核として

【黒須】総合型クラブは、そもそも住民がつながって何かやろう、というところからスタートしています。今回の震災を契機に、人と人、組織と組織、地域と地域がつながっていく。最後に、まとめとして、総合型クラブが復興に向けて地域社会で果たしていく役割について話していただきます。

【西館】被災県とはいえ、私たちのクラブは支援する側のクラブでなければならないという自覚があります。被災地のクラブの中で、つながっている地域は沿岸部の野田村や普代村で、車で1時間半~2時

間のところにあります。バスを手配して来てもらったり、冬は1泊で雪遊びや交流会などの計画も検討中です。こちらからクラブへ指導者を派遣してコーディネート・トレーニングのようなスポーツイベントを開催したり、幼稚園に行って幼稚園の先生や子ども達対象の教室を行わせてもらったり、スポーツ少年団の全体行事の中に組み込ませてもらったり、こちらから出向く方を中心にやっています。

県体協と連絡をとって、つながりがあったクラブの安否確認をどう行ったらいいのか、アドバイザーの伊藤さんに聞くと、伊藤さんに連絡が集まっていたので、情報を私たちも確認させてもらいました。いきなり連絡しても何かあれば気まずいです。伊藤さんからは、沿岸部のクラブの活動状況を伝えてもらって助かりました。

最近メルマガを読んで、もっといろいろなクラブに読んでもらい、勉強会や意見交換の題材にしたいと思いました。点々としていたものをしっかりつなげる絆やつながりをテーマとして、今後、活動の方向性を考えていきたいです。

【黒須】被災時だけでなく、普段の生活の中でも、つながりの仕組みを築いていければいいですね。

【海老根】本来、震災がなくても、必要な人間関係の大切さが伝わればいいと思います。こんな大変な思いを他の地域ではしてほしくない。日常的な環境をつくるのは総合型クラブができることです。「活動再開した」「普通に活動できている」と聞くとほっとします。

福島県内のなかでもエリアごとの地域性が強いのですが総合型クラブではそれを取り払い、1つのクラブだけではできない積極的な取り組みを今後作っていきたいです。

震災から失ったものも多いですが、それ以上に学ばなければならないと思います。中学校で話をする機会があり、中学生も「何かしたいが何をしたいかわからない」というので「今は勉強して、やれることを増やして下さい」と話しました。

避難所や仮設住宅にいる方は終わりが見えない一方で、県外に引っ越すなど日常に戻った人もいるという時間軸のズレが県内には存在します。身近な人達同士に関わり続けていくことが必要です。住民同士で関わり続けていくことができるよう、クラブが核になればいいと思います。

さくらスポーツフェスタで受け付けをしていると「久しぶり」、「元気にしてた?」と、現在県内外に

離れて生活している町民が声を掛け合っていました。それだけでも、大きな意味があったと感じました。何かと便利になり人の関係性が希薄化していますが、いざという時は自分の足で歩かなければならない、そして頼れるのは身近な人という、本当に大切なものが見えたような気がします。総合型クラブでは効率性や経営面の話が先行していますが、我々自身も本当に大事なものを今一度再確認して支援にあたりたいと思います。クラブの方々も再開にあたって強い思いをもって力をためていると思うので、今後も一緒に取り組んでいきたいです。

クラブ自身が一步前に踏み出す

【林】スタッフもクラブもバラバラに避難して、連絡がつかない状態でしたが、いろいろな情報が広域スポーツセンターからクラブに伝わってきました。富岡町は桜で有名です。春には、桜のウォーキングをしていただき、広域スポーツセンターの方々に大変お世話になりました。

私たちはまだ先は見えないし、いつから通常の活動ができるのかわからない状況です。自宅に帰ったとしても除染の問題もあります。一時は職員が3名から1名になり、新しいクラブマネジャーを迎えて2名体制となりましたが、本当にクラブは総合型として何が出来るかすごく悩みました。

皆さんの話を聞いて勇気づけられました。受身でいるだけではダメだと再確認しました。いろいろな支援をしていただけるのはうれしいですが、クラブ自身が一步前に踏み出し、1人立ちしていかないとなりません。

クラブの目標は、今近くにいた支援できる住民に対して、希望を捨てず帰れることを信じて、くじけない心に戻ることができる日まで長続きさせることです。そのためには、いろいろな面で情報提供したり、スポーツ面で支援したりしていくことが重要な役割だと再確認しました。私たちががんばっていく、その道しかないと思います。

【相田】震災後の平成23年6月30日に「宮城県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会」が設立しました。震災前より宮城県内で作る時には有意義なものにしようと検討を重ねてきました。震災後あらためて「横のつながりが大事」と各クラブが実感し、当初の予定から3ヶ月遅れで協議会の設立に至りました。NPO法人アクアゆめクラブに協議会の事務局

を引き受けていただき、震災の中で協議会として何が出来なのか話合っているところです。

一番多い悩みは活動場所がないという問題です。活動拠点の使用可能な体育施設は避難所や物資倉庫の役割担っていましたが、避難所の機能が解除され倉庫などになっています。建物を修理するにも予算が無いため、多くの施設が使用出来ない状況です。東日本大震災の影響で施設が使用できないなど、やりたくても事業を実施できないことから協議会では「クラブの相互事業」を考えています。支援可能なクラブは施設の空き情報を情報共有する「施設支援事業」と支援可能なクラブが他クラブの受け入れ可能なイベント・教室等事業について情報提供をする「クラブ交流事業」の2つの柱で進めようと話を進めています。

困難な状況下でも、みんなで連携し出来ることから工夫し活動しているクラブの姿勢は大変素晴らしいです。



相田恵美さん

地区を超えたコミュニティをつくる役割

【伊藤(弘)】福島県は原発の件で悲惨です。七ヶ浜は13の行政区があり、各行政区でのつながりは非常に深いですが、それが今はバラバラになっています。

全く違う行政区の人が同じ仮設住宅に入っており、地区に戻りたいけど戻れない。行政区復興計画の説明会が行われていますが、移転を余儀なくされている地区で3地区に分断されるなど、地区ごとでの集団移転もできません。バラバラになった地区のコミュニティを、スポーツでどう再生できるかがクラブの課題です。

今、考えているのは、平成24年3月11日の震災1年後に何かできないかと。コミュニティづくりのために温泉に行こうという話もありますが、地区を超えた世代のまとまりを、私たちの総合型クラブで

何かしたいと考えています。たまたま 50 代以上の人を対象に「いきいき教室」を行っています。地区を越えたコミュニティができています。「この歳になって親友ができると思わなかった」と参加者から言われる位、教室以外でも仲良く、食事や旅行に行ったりしています。

私の母親は朝夕に毎日散歩をしていましたが、震災後はできないのでラジオ体操を始めました。2 日後に父が入って 2 人になり、3 日後に 3 人になり、今は近所の人が入って 12 人になり、家の前でラジオ体操を朝やっています。それをみて、強要しないで地区のつながりで自然に始めることができないだろうかと思いました。仮設住宅でもやっていますが、どうしても子どもと父兄が集まってきます。

平成 24 年 3 月 11 日には町で式典があります。夜間には 7 つの浜で、町民全員が見える所で花火を上げるなど、町民同士のまとまりができるような企画を検討しています。

クラブの自立に向けて必要なこと

【海老根】数々のありがたい支援に対して、自立との間で、どこまで甘えて受けていいのか被災地では悩むところです。

【伊藤(弘)】自立を遅らせてしまう支援もあります。

【林】来年度の toto 助成金の説明会を聞き、被災地枠では自己負担金がなく 10 分の 10 を支給してくれると聞きました。それは自立のために役立てられると思います。

ただし、賃金面で頼ってしまうと助成金がなくなった時に継続して雇用できなくなってしまいます。町にお願いして事業費の部分で情報を集めて申請が許可されるように努力しています。制約が多くてどうなるかわかりませんが、10 分の 10 の助成金は自立に役立ち、人手は地元の人に頼むように考えています。

【海老根】toto 助成金は、いろいろ意見を聞いて使いやすい形に少しずつ変わってきています。担当者は柔軟に対応してくれると話しています。実態として出てきたことを可能な範囲で変えていければ、助成金はありがたい支援になります。また、県と日体協からは、情報が今後も継続的におりてくる形であれば助かります。

【黒須】県外のクラブが被災地 3 県に来る時など、人の交流などに使えるお金はありませんか。

【伊藤(啓)】県内のクラブが他県に行く時に使えると思います。

【林】今回のフェスタに埼玉県の浦和スポーツクラブが、他の助成金でバス代を工面して来てくれ、ありがたかったです。

【相田】toto 助成金は助成対象となる経費に様々な制限があります。本当に使いたいところには使えないというのが実感です。クラブが本当に必要としているところを救えるようなものがあれば良いです。クラブの温度差がかなりあるので、自立との境界線が難しいと感じます。支援を必要としているところとそうでないところがあるので、きめ細かく柔軟な支援があれば良いと思います。

【黒須】被災 3 県のクラブは相対的に言えば、体力が落ちています。そのようなクラブに対して、被災地以外のクラブがマネジメント面も含めて相談相手になってくれるといいと思います。自分達を見守ってくれるクラブや仲間がいると大変励みになると思います。クラブ間のマッチングを呼び掛けてもらいたいです。

【伊藤(弘)】以前イベントでは、実行委員が少なく困りました。イベント開催時の人的支援、お手伝いをしてもらえると非常に助かります。ただ、単発で来ていただくよりも、3 年間位の長期の間、月 1 回は来られるよ、という方が、何かと計画なども進めやすいです。

【海老根】福島県の場合、一度見放された思いもあり、県外から来てもらえればうれしいですが、実際のところ来るのに抵抗があると思います。福島県は全国的にみると放射能が高く、自己判断で来てもらうしか、今はありません。

まず今は、クラブの日常生活を取り戻すことが先です。来年再来年にも支援の気持ちをいただけるのはありがたく、そのために我々ではできるだけ情報を発信し続けたいです。

【林】仮設住宅の人から聞きましたが、山梨県の総合型クラブが、仮設住宅や避難所に運動指導に毎週のように来ていたそうです。

【伊藤(啓)】NPO 法人フォルダが支援している大船渡には、早稲田大学の学生が指導に何回か来てくれて、おばあちゃん達が「若い子が来た」とよろこんでいます。2 週間か月に 1 回でも来てくれるといいと思います。岩手県で言えば、内陸のクラブは支援を受ける必要性はなく、沿岸部は支援が必要だし、人手も足りない状況です。

【黒須】被災地支援を一過性に終わらせてはいけません。総合型クラブの活動を通して築き上げてきたネットワークを拠り所に、継続的・持続的な支援を続けていくことが必要です。支援がミスマッチにならないように、被災地のニーズを把握して、3 県のアドバイザーからリアルタイムの情報を集めて、全国に様々な情報を発信していきましょう。

他に優先すべきことがある中、本日の座談会に集まっただき、また貴重なお話や活発なご意見をいただき、ありがとうございました。（終了）

※関連リンク

・メルマガ（第72号、2011年10月）半九レインボースポーツクラブ（宮城県宮崎市）の支援活動

http://www.japan-sports.or.jp/local/news/uploadFiles/20111020103245_4.pdf

・メルマガ（SCPR-26号、2011年12月）宮城県のアクアゆめクラブを通じて海産物やTシャツを購入することによる支援

http://www.japan-sports.or.jp/local/news/uploadFiles/20111205102342_4.pdf

・メルマガ（第73号、2011年11月）NPO 法人フォルダ&早稲田大学生による仮設住宅での支援活動とクラブ創設

http://www.japan-sports.or.jp/local/news/uploadFiles/20111118174053_4.pdf